

校訂 金剛般若經集驗記 (四)

山口 敦史
今井 秀和
迫田 (吳) 幸榮

A revised edition of the *Kon-gō-han-nya-kyo-shū-gen-ki* (4)

Atsushi YAMAGUCHI
Hidekazu IMAI
Sachie Kure SAKODA

凡例

一 凡例は、「校訂 金剛般若經集驗記 (一)」「大東文化大学紀要」(人文科学) 第五十一号、二〇一三年三月) に同じ。

(本文)

昔者媧皇御極斷鼈以補天、夷羿彎「音詣」弓解鳥而落日。塔臺之上、載驅夏後之龍、瑤水之濱、更舞周王之駿「音浚」。仙公之潛流吐火、元方之匿影分形。況乎道契如如、功無等等。將開于塔、移天人于他界、不起于座、示妙喜于閻浮。聖烈、巍巍、固無得而稱矣。故迹其尤異者、列爲神力篇。

(校異)

功 (黒・高) 一切

(大意)

昔、女媧様は天子の位におつきになり、大龜の足を切断し天の欠けたのを補った。夷羿は弓を引いて鳥を打ち、太陽を落とした。瑤台の上には、まさに夏后啓の乗った龍が駆けめぐり、瑤水の浜には、さらに周の穆王の駿馬が舞うように走る。仙公は煩惱を心深くに潜ませて火を吐き、元方は(自らの)姿を隠し、(また、その身を)幾つにも分けたことだった。ましてや仏道は真如を約束し、その功德は比べるものがないほどである。いままさに塔を開こうとすれば、天人は他界に移り、座禪の席を起たなければ、(維摩居士の住む)妙喜世界を闔浮提に示すことになるだろう。聖人の気高い勲はそびえ立ち、もとより欲張ることも目に見える名誉もない。よつて、このような行為のうち、もつともすぐれたものを記録に残し、列挙して神力篇とする。

4 宮亭湖神

(本文)

蕭瑀金剛般若經靈驗記曰、梁時有一婆羅門師、名法藏、能持經呪辟諸邪惡。有一小僧、學呪數年、自謂成就、堪伏邪魅。同行來詣江畔、遂投宮亭湖神廟止宿、誦諸禁呪、其夜廟神遂來殺之。藏聞弟子身死、怨恨、自來到神廟座、夜宿誦呪、因亦致死。于時同寺一僧、每持金剛般若經、聞藏師徒並爲神殺死、故來神廟座上。誦般若經、夜半聞有風聲、極大迅「音峻」速。須臾見一大人、身形瓌異、奇特可畏、種種形容、眼光似電。師端坐正念、誦經不輟、不怕不懼。神來至前、攝諸威勢、右膝著地、合掌恭敬、聽誦經訖。師問神曰、「檀越是何神祇。」初來猛迅、後乃寂然。神言、「弟子是此宮亭湖神、爲性剛強猛戾。見師誦習大乘經典、功德大大不可思議、是以伏聽。」師言、「檀越既能如此信敬、何意打殺前者誦呪二僧。」神言、「彼僧不能誦持大乘經典、弟子入廟、逆前放罵、專惡言降伏弟子。二僧見弟子形貌、自然怕死、非故殺比丘。」諸人知師入神廟宿、恐同前二僧。至明相率往廟迎問、師乃安然。諸人等甚大嘉慶、問師具知。諸人因此發心受持般若經者甚衆。

(校異)

座(黒)―廡

(大意)

蕭瑀「金剛般若經靈驗記」所収の話である。梁の時代に法藏と名乗る婆羅門僧がいた。經典や呪文を能くし、様々な邪惡を除いた。(とある) 一

人の小僧がいて、(法蔵から)呪文を学ぶこと数年になり、自ら術を成就したと言い、邪悪な物の怪の調伏をさかんに行った。(法蔵に)同行して来て江畔に詣でて、ついに宮亭湖の神廟に身を投じてそこに宿泊し、いろいろな禁呪を唱えたが、その夜、廟神がやって来てついに小僧を殺した。法蔵は弟子が死んだことを聞き、大いに怨んで、自ら神廟の座に至ると、夜に宿泊して呪文を唱えたが、このことがまた(彼の)死をまねくことになるのだった。

そのとき、同じ寺の一人の僧は、常に『金剛般若経』を所持していたが、法蔵師と門徒が(宮亭湖の)神のために殺されたことを聞いた故、神廟の座の上に行って来た。『金剛般若経』を唱えていると、夜半、風の音があるのを聞いた。(風は)とても大きくて速かった。たちまちにしてひとりの巨人が現れた。その身体は見たこともない怪しげなもので、種々の容貌は恐ろしく、(たとえば)眼光是稲妻のようだった。僧侶は姿勢を整えて座り、一心に念じ、経典をずっと唱えて、全く恐れることがなかった。神は僧侶の前にやって来て、最初の威勢のよさをおさめ、右膝を地面につけて、うやうやしく合掌すると、経典の誦誦を聞き終わった。

僧侶は、神に質問した。「信者よ、お前は何の神様か」。初めて来たときは勢いがよかったが、いまはすっかりしゅんとしている。神が言った。「仏弟子(であるわたくし)は、ここ宮亭湖の神で、その性格は荒々しく無頼であります。師が大乗経典を誦習する様子を見て、その功德が広大にしてはかりしれないほどであることを知り、ここで拜聴しているのです」。僧侶が言う。「お前さんはすでにこのように信心の心を持っているのに、どうしてこの前の呪文を唱える二人の僧を殺したのか」。神が言う。「あの僧たちは、大乗経典を誦持することはできません。わたくしが廟に入ると、前に向かって(わたくしを)ののしり、もっぱら悪口を言いこのわたくしを降伏させようとしてしました。二人の僧は、わたくしの容貌を見て、勝手に恐怖して死んだのです。わざと僧を殺したではありません」。

皆は、僧侶(法蔵)が神廟に入って宿泊したことを知り、さきの二人の僧と同様の目に遭うことを恐れた。明るくなってから皆で一揃に廟に行き出迎えると、僧侶は安泰だった。皆は大いに慶賀し、僧侶に質問して事情を詳しく知った。皆はこのことよって発心し、『金剛般若経』を受持する者がとても多くなった。

5 劉劭

(本文)

又貞觀元年、蓬州儀隴縣丞劉劭、前在江南任縣尉、忽有一鳥於房門前樹上鳴喚。人云「是甚惡鳥。此鳥至者、必殺家長。」劭聞恐懼、思念無計。夜間夢見一僧、令讀金剛般若經一百遍、善神來援。此樹隔舍擲著大街巷中竟。無亦答般若之力其大矣哉。

(校異)

なし

(大意)

また貞観元年(六二七年)、蓬州の儀隴県丞(副県長にあたる)、劉弼りゅうひという人が、以前、江南で県尉として勤めていた時(のこと)、突然、部屋りやうひの(戸の)前の木に止まっている鳥が鳴きわめいた。人が言うにはこうである。「これは悪鳥だ。この鳥がいるところでは、家長が必ず殺される。」劉弼は(その話を)聞き、恐懼していたが、どうしたらいいかが分からなかった。夜、夢でとある僧侶を見た。「金剛般若経」を百遍よむことを命じられ、善を施す神が援助しに来た。(すると)その木は、なんと官舎を隔てた大通りの脇にある小道に飛んでしまったのである。般若の力は実に大なるものである。

6 李虔観

(本文)

郎余令冥報拾遺曰、隴西李虔観、今居鄭州。明慶五年、丁父福胤憂、乃刺血寫金剛般若経、及般若多心経各一卷、隨願往生経二卷。出外將入、即一度浴後、忽聞院中有異香氣、非常郁烈。隣側並就觀之、無不稱嘆。「余令曾過鄭州見彼親説、友人所傳」

(校異)

なし

(大意)

郎余令『冥報拾遺』所収の話である。隴西ろうせい(出身)の李虔観は、いま鄭州にいる。明慶五年(六六〇年)、ちょうど父親の福胤が亡くなり、ゆえに、(指を刺して)血で『金剛般若経』および、『般若波羅密多心経』を各一卷、『隨願往生経』を二巻書いた。外出してまた部屋に戻って、すぐに一度沐浴した後、突然、庭から不思議な香りがして、(それは)非常に濃厚であった。隣近所は、この奇跡が示されたことを知り、みな、褒め称えない人はなかった。「郎余令は鄭州に行つて彼と会い、彼自らの話を聞いたと、友人によつて伝えられた。」

7 席元禱

(本文)

又曰、曹州濟陰縣西二十里村中、有一精舍。龍朔二年冬十月、有野火暴起、非常熾盛、乃至精舍、遂踰越而過、兼及僧房、草舍焚燼總盡、唯有金剛般若經一卷、猶儼然如故。〔曹州參軍事席元禱所說〕

(校異)

席(黒・高)―[禱]

(大意)

また別の話である。曹州、濟陰県、西二十里の村に、一つの精舎があった。龍朔二年(六六二年)の冬、十月、(野に)不審火が突然起き、非常に激しく燃え上がった。(炎は)いよいよ精舎に届きそうで、ついに(精舎を)越えて、僧侶の部屋にまでおよび、草葺きの小屋までもが全て焼き払われたが、ただ【金剛般若経】一卷のみが、まるでもとのままに整然としてそこにあった。〔曹州の参軍事・席元禱による話。〕

8 孫壽

(本文)

又曰、明慶年中、平州人孫壽於海濱遊獵、見野火炎熾、草木蕩盡。唯一叢茂草、不被焚燬。疑此草中有獸、遂以火爇之、竟不能著。壽甚怪之、遂入草間尋覓、乃見一函金剛般若經。其傍又見一死僧、顔色不變。火不延燬、蓋爲此也。〔孫壽親自見、說之〕

(校異)

なし

(大意)

また別の話である。明慶(顯慶。避諱の為に明慶と表記。六五六年―六六一年)年中、平州の人、孫壽が海浜にて狩りをして楽しんでいた折、野の不審火が燃え上がり、草木がすべて焼き払われたのを見た。(しかし)たった一カ所だけが焼き払われなかった。その茂みの中に(野火から逃

れた) 獸が隠れていると疑い、ゆえに火で焼こうとしたが、火がつかなかった。孫寿ははなはだ怪しんで、茂みの中を捜してみた。そこで「金剛般若経」一函を見つけた。側に死んだ僧侶も見つけたが、(その) 顔色は変わっていないかった。炎が燃え広がらなかったのは、すべてはそのためであつたのか。「孫寿が自ら見て語つた。」

9 喬卿慳

(本文)

又曰、前大理司直河内司馬喬卿慳、純謹有至行。永徽年中、爲揚州戶曹、丁母憂、居喪毀瘠、刺心上血、寫金剛般若經一卷。未幾於廬〔音閩〕上生芝草二莖、經九日長一尺八寸、綠莖朱蓋、日漑汁一升。傍下食足、味甘如蜜、盡而復生、如此數四。〔音郷同僚數人向余令說、余令孝子傳亦具說焉〕

(校異)

なし

(大意)

また別の話である。さきの大理司直にして、今の河内司馬である喬卿慳は、純粹にして正直で行いが慎み深く、かつ高い品位のある人だった。(喬は) 永徽(六五〇年―六五五年) 年中、揚州戸曹であつた。ちよつど母を亡くして、(家で) 服喪中に、悲しみ瘦せ衰え、心臓近くのところから採つた血を用いて「金剛般若経」一巻を書いた。(それから) あまり経たないうちに(服喪のために立てた) 草堂に珍しい草(瑞草)が二本生えた。九日間が経ち一尺八寸に成長し、莖は緑にして先端が赤く、一日に一升の汁が垂れた。その足下の傍に行くところまで満足りくまで食すことができ、味は蜜のように甘味で、絶えても再び生じ、(これを) 繰り返すこと四度であつた。「喬の同僚數人が郎余令に語り、なお、郎余令「孝子伝」もつぶさにこの話を載せる。」

10 楊體幾

(本文)

大中大夫楊體幾、京兆人也。去大極元年、任饒州長史。奉勅兼充銀山大使、檢校採銀。其銀之窟、所役夫匠、動越萬人、側近百姓、共爲章市。

其市之中、總無瓦屋、咸以蓬條爲舍、簷廡「音撫」相接。其夜有一家忽然失火、市内之屋、蕩盡無餘。唯中心一家、火所不燒。體幾巡檢、問其所由。爲家內有一老人、常受持金剛般若經。般若之力、火不能燒。合州之中、莫不驚異。

(校異)

なし

(大意)

大中大夫の楊体幾は京兆の人である。さる大極元年(七二二年)には饒州長史であった。朝廷の指令により、代理で銀山大使を兼任し、銀の採掘を監督していた。その銀鉞(の洞窟)で働く人員(労働者・技術者・工人など)は総勢万人を越え、側近も百姓も、(ともに)一つの集落をなしていた。その集落には、瓦の(瓦屋根の)家はまったくなく、すべてが草や藁でできていて、屋根と家が密接していた。ある晩、一つの家が突然火事になり、集落中の家は全てが残らず焼き払われた。ただ中心部にある一軒の家は火に燃やされなかった。楊体幾が巡検し、理由を訪ねたら、その家のおじいさんが常に「金剛般若経」を受持していたとのことだった。般若の力により、火に燃やされなかったのである。(このことは)合州中に伝わり、驚かない者はなかった。

11 清虚(その一)

(本文)

梓州惠義寺僧釋清虚、俗姓唐氏、立性剛烈。少誦金剛般若經。去萬歲通天元年十月初、於齊州靈巖寺北三總山中、深心發願、爲三途受苦衆在等、受持金剛般若經、願一切衆生、早得離苦解脫。從十月三日誦至六日、有七頭鹿忽來聽經。及至誦時即來伏聽、誦訖便去。及其總了、更不復來。僧清虚去萬歲通天元年十月二十三日、西於齊州靈巖寺北三總山中、端坐誦經。忽狀似夢、遂不見住處屋宅及山河石壁、唯見一城、似梓州城。其僧從東門入、至一橋見一捉鋪人、是山東人士。遂行出城西門可五六里許、又見一城、在於道左。其城縱廣可有五里、其僧下道至城東門、其門纔猶可容一人入。僧問捉門者曰「得知大王何時放地獄受苦衆生」報云「昨日午時、齊州靈巖寺有一禪師、手執錫仗、年可七十、已上來詣王前、語王言「有一客僧爲三途受苦衆生誦金剛般若、王得知否天王何時息放地獄受苦衆生」王報阿師言「弟子先知、明日午時爲阿師放却少分輕者。」其捉門人謂其僧云「阿師即去、請更莫語。」其僧遂迴還從西門入、到一驛門前、前見一顆瓜、如碗許大、破作兩片。僧食一片、仍餘一片。至前提鋪處、鋪家問僧何處得此瓜、請乞一片。其人得此瓜食、口云「十月有此美瓜。」所言未訖、忽見城西門外有無量人衆、入城門來。婦女多、大夫少、縷「音催」麻服者

衆、吉服者稀〔音希〕。至其僧坐前、各各禮拜〔蒙阿師濟拔。〕其僧報云「元不相識、何處救拔」後有三箇獠奴、亦來禮拜〔蒙阿師救拔弟子。〕其僧問云「你是誰家小兒。面無血色太劇顛顛、從何處來。衫衣並新、何因如此。」答言「我是玄宗觀家人、爲盜觀家穀麥、治酒買肉、不知多少。被閻羅王勘、當經今五年、不識漿水一滴。其衫是生時所造、死後始著。當被勘、當其衫被剝、掛著奈何樹頭、所以得新。」語訖辭去、靈驗如此。

(校異)

西(黒) 一日西

北(黒・高) 一地

狀(黒) 一非

住(黒) 一所住

途(黒) 一塗

獠(黒) 一獠

顛顛(黒) 一顛

被(黒) 一破

(大意)

梓州惠義寺の僧、釈清虛は、俗姓は唐氏、性質は勇猛であった。幼いときから「金剛般若經」を誦誦していた。去る万歲通天元年(六九六年)十月初め、齊州靈巖寺の北にある三綵山中にて、信心深い心から發願し、地獄の三惡道で苦しみを受けている衆生たちのために、「金剛般若經」を受持し、一切衆生に対して、早く苦痛を脱して解脱の境地を得んことを願った。十月三日から誦誦して六日になったとき、七頭の鹿がいて、見る間にやって来てお経を聴いた。誦誦する時になると、すぐさま来て伏して聴講し、誦誦し終われば去っていく。すべて終わったら、もう来ることはなかった。

僧、清虛は、去る万歲通天元年十月二十三日に、西に向かい齊州靈巖寺の北にある三綵山中において、端坐して經典を唱えた。たちまち夢のような心持ちになり、とうとう住所・家屋敷、および山河・石壁が見えなくなった。ただ一つの城だけが見え、それは梓州城に似ていた。

その僧(清虛)は東門より入って、一本の橋に到着し、門環を握っている一人の人を見ると、それは山東人士であった。ついに行つて城の西門を出れば、だいたい五、六里ほどだった。また、ひとつの城が見え、(それは)道の左にあった。その城は、縦の広さが五里ほどだった。その僧

（清虚）は道を下って城の東門に到着し、この門はわずかに一人だけが入れるくらいなのかといぶかった。僧（清虚）は門を押さえている人に質問した。

「大王が、いつになったら地獄で苦痛を受けている衆生を解放するか知っていますか」と。

（その門番が）答えて言うことには、「昨日の午の刻、斉州の靈巖寺に一人の禪師がありました。それは手に錫杖を持ち、年七十くらいで、すでに（地獄に）上洛し王の前に参り詣でて、王に語ってこう言いました。「一人の来客僧がいて、三悪道で苦痛を受けている衆生のために『金剛般若経』を誦したがるが、王は知っているだろうか、どうだろうか？ 天王は、いつになったら地獄で苦痛を受けている衆生に安息を与え解放するのだろうか？」と。王は、その禪師に答えてこう言いました。「弟子よ、かしこき者よ。明日、午の時、師（清虚）のために微罪の刑の者を解放する」と。

その門を掴んでいる人が清虚に言うことには、「師よ、すぐに立ち去られたし。どうか（ここでの様子を）語ってくださいな」と。清虚はついにあちこちを巡って西門より入り、ひとつの駅の門前に到って、前にある一つ真菰まごもを見るに、お椀ほどの大きさで、それを割って二つにしてあった。僧（清虚）は一片を食べ、一片を残した。先程の門還を握っている人の処に至ると、その人は、僧（清虚）にどこからこの真菰を得たのか聞いて、半分を所望した。真菰を食べることができたこの人は、それを口にして、「十月にこんなおいしい真菰があるなんて」と言った。

まだ言い終わらないうちに、城の西の門外を見るに、無数の人の集団があつて、城門に入ってきた。婦女が多く、大夫は少ない。麻布の喪服を着た者が多く、吉事用の服を着た者はあまり見かけない。清虚の座っている前に至り着き、おのおの礼拝して、「禪師様のおかげで救済されました。」（と言った）。清虚は答えて言った。「もともと、お互いに知らない同士です。どこで（あなたを）救済しただろうか」と。その後三人の狼族の奴隷がいて、またやって来て礼拝した。「師よ、弟子は救済されました」と。清虚は質問して言った。「おまえは誰の家の子どもなのか。顔色が悪く、とても憔悴している様子だ。どこから来たのか。衣服は新しいけれど、何の因縁でこのようになったのか」と。答えて言うことには、「私は実は信心深い観家の人です。観家の穀物・麦などを盗んで、酒を調達したり肉を買ったりしたことは、数知れず行いました。（よって）閻羅王の取り調べを受けて、ちょうど五年たちましたが、おかゆの一滴をも貰っていません。この衣類は生きておるときに作ったもので、死後はじめて着ているのです。閻羅王の取り調べを受けて、衣類を剥がされ、どこかの樹木に引っかかたか（分かりません）。よって、新しいものを得たのです」と。語り終わって別れのあいさつをして去った。靈験とはこのようなものである。

12 清虚（その二）

（本文）

萬歲通天元年十一月二十三日、清虛在齊州三總山中、暮間忽有東地風起、遙見野火燒山、相去可有一十餘里。至人定時、其火漸近、去僧坐處司百餘步。其僧心驚、誦經念佛、并誦十一面呪。其火去所住屋可五十步已來、忽然迴風、其火遂自滅。逮「音代」至一更、忽然還熾、僧將掃帚撲火、遂不焚。去屋不逾十步、火即自滅。其屋十步之内、茅共齋「音鹽」平、仍有亂草一聚、去脊不盈數尺。至時亂草及茅、並爲煨燼、唯有臥屋得免火燒。其東北兩面、屋齋并被火燒。信知般若之力、不可思議。

(校異)

なし

(大意)

萬歲通天元年(六九六年)十一月二十三日、清虛が齊州の三總山の中にいると、暮れ方に突如、東の地に風が起き、遠くから見ていると野火が山を焼いた。ここからはなお十一里余りあった。就寝する頃、その野火は段々と近付き、僧(清虛)の座禪しているところまで、あと百歩あまりに来ていた。僧(清虛)は驚き、「金剛般若經」をよんだり、仏を念じたりした。並びに十一面呪も唱えた。野火は、もう住居まであと五十歩のところまで来た。

突然つむじ風(旋風)が起き、火はやがて自ら滅した。初更(一更。夜七時頃から十時頃)に至り、突然、再び火が燃え始めた。僧(清虛)はほうきで火を消したので、燃え続かなかつた。家屋から十歩も届かないところで、火はすぐに自ら滅した。その家屋の(周り)十歩以内で、萱でできている(屋根の)軒は平らであった。屋根の大棟から数尺も満たないところには雑草が一束あった。時が経ち、その雑草と萱はともに灰になり、ただ寢室だけが火事から免れた。その(家屋)の東、北両側、屋根と軒はともに焼けた。(そして)般若の力を疑うことなく知ることになり、(それは)言葉に尽くせないほど素晴らしいものであった。

13 清虛(その三)

(本文)

登封元年二月、其僧清虛至徒來山中、尋常誦經、不過兩遍、腰脊疼痛、不能堪忍。僧於佛前遂發誓願弟子今夜結跏趺坐、爲一切衆生誦金剛般若、必滿五遍然後始息。縱使疼痛、狀猶割刺、終須滿數、以死爲限。誦至三遍、骨節有如支解。誦至四遍、有物在佛堂内闕、聲似水牛大蟲爭力而闘、佛堂亦動。誦至五遍、將半諸痛都愈。舉目四望、朗然明徹、佛殿講堂、一皆不見。唯覺端坐在於空中、大地平正、無有高下。及至同伴來喚、空聞

其喚、不見有人。同伴曳手挽起、方始醒覺。般若神力、無得而稱焉。

(校異)

封(黒・高)―對

(大意)

万歳登封元年(六九六年)二月、その僧、清虚が徒来山中に来て、いつも通り「金剛般若経」をよむと、二回も過ぎない内に腰と背骨が痛くなり、耐えられなくなった。そこで僧(清虚)は仏前にて心願を發し、こう誓った。弟子(わたくし)は今夜、結跏趺坐し、一切衆生のために「金剛般若経」をよみ、必ず五遍を満たしてから終える。たとえ痛くても、(症状が)まるで切られたり刺されたりするようであっても、死ぬまで(死なない限り)かならず回数を果たす、と。

三回よんだところで、まるで骨や関節がバラバラになるような感じがした。四回よんだところ、何か仏堂内で争い、(その)声は水牛か大虫(虎のことか)か、力争いして戦っていて、仏堂もそれによって振動していた。五回(目)までよむと、様々な痛みの半分くらいが癒えた。目上(虎のことか)にやり周りを見回すと、清らかに明るく、仏殿講堂のいずれも見えなかった。ただ空中に端座しているように感じ、地面(全て)がまっすぐ平らで、上下の感覚もなくなった。仲間が呼びに来たときも、ただ声が聞こえ(るだけで)、人の姿が見えなかった。仲間が手を引っぱって起こすと、初めて覚醒した。般若の神力は、無にも有にも捉われないものである。

14 清虚(その四)

(本文)

聖暦元年仲秋八月、其僧清虚、時在豫州。向法王寺禮拜、見舍利塔内著一切經、其塔上四面無門、遂有群鶴、入舍利塔内。見僧入塔禮拜、一時飛散。其僧禮懺既畢、至塔門内坐。一鶴從空飛下、直入僧懷、歷左右肩〔音堅〕、遂至頭上、下繞經三匝、便即高飛。鳥尚解敬持經、在人亦希。勉勵〔音例〕。

(校異)

なし

(大意)

聖曆元年(六九八年)仲秋八月、その僧、清慮は、時に予州にいた。法王寺に向かい、礼拝していると、舍利塔内に「一切経」があるのを見た。その塔には四面に門がないので、鳩の群れが舍利塔の中に入り込んでいた。僧が塔に入り礼拝しているのを見て、一時飛び散った。(その)僧は礼懺し終わると、塔の門の内側に座った。一羽の鳩が空から(飛んで)降り、まっすぐに僧の懐に入ると、左肩右肩にとまって、最後は頭上に至った。下に降り、お経を三周したところで(空)高く飛んで行つた。鳥でさえお経を受持することに敬意を払うことを理解しているのだ。人間でもまた稀であるのに。勉勵すべし。

15 清慮(その五)

(本文)

長安三年閏四月内、其僧清慮、向藍田縣南山中悟真寺坐夏。其寺上坊禪院、舊無泉水、皆向澗底取水、往還十裏有餘、禪院僧徒、將爲辛苦。華嚴法師康藏、共三綱平議、衆請祈泉。其僧報衆言、「此大難事」。徒衆咸曰、「阿師既在此座夏、作意念誦、爲寺家祈請、不廢修道、願不推托」。既不能苦違衆心、欲覓一閑處念誦。其禪院上坊下坊皆亦人滿、唯中間有一彌勒閣、閑而恒鎖、無人敢開。僧既見閑、即喚直歲平章、欲開此閣、于中念誦。主人并客僧等語其僧言、「莫向此閣、閣中有一黑蛇、其大如鉢、身長二丈、常護此閣、恐損阿師」。其僧報云、「江南有宮亭湖神、身長數裏、變化自在、亦是大蛇、能致驟雨飄風、尚來歸伏、況乎小者、亦何足言」。其僧即素鑰〔音藥〕匙開門、把火直入、更不見物、唯聞蛇腥。其僧正念燒香啓請、「弟子聞大身衆生、守護此閣、恐是過去賢聖、或是山龍諸神。弟子今日向此閣中、一心念誦、爲上坊禪院求請一泉。幸願諸神、咸加擁護、勿令恐懼、聽誦金剛般若、布施弟子一箇小泉、以供上坊禪院」。卽至心念誦、一坐三日三夜、目不交睫〔音接〕、心眼之中、見三婦人在彌勒閣西北、於山之腹、以刀子剗地、忽然不見。迄于明發、遂向東北、臨澗合眼誦般若經、見一道水、從婦人刀子掘地處來、歷僧前而過。經三五日、儼然常見、未以爲信、誦仍不輟。更經二日、轉轉分明。其僧卽移向見婦人刀子掘地處誦經、合眼還見水從背後流出。又經三日、其僧遂取杖杖看、撥〔音鉢〕却木葉、見一濕地、大小如二尺面盤、將鋤掘之、遂見一水脈、因成一坎、可受石餘轉。更至心誦得五遍、其坎〔堪感反〕中水、不覺滿盈。引向禪庭、供給衆用。則知聖無不應、感而必通。信乎般若之功無得而稱者也。

(校異)

院(黑・高)―院院

大(黒・高)―火

閑(黒・高)―閑

閑(黒)―閑

閑(黒・高)―閑

袂(黒・高)―袂

(大意)

長安三年(七〇三年)閏四月の内、僧清虚は、藍田県南山中の悟真寺に赴いて安居した。その寺の上坊禅院は、古くから湧き水がなく、皆、谷底に行つて水を取り、往復で十里あまりあったので、禅院の僧徒は、とても苦勞していた。

華嚴法師・康蔵は寺院内の三綱と一緒に議論し、皆は湧き水が出ることを祈願した。その僧(清虚)が皆に知らせて言うことには、「これは大変な難しい事業だ」と。寺の一行が皆言うことには、「師はすでにこの寺にいて安居し、心を込めて経を唱え、寺家のために祈請し、修行を怠らない。どうか事にかこつけて(この難事を)断るなどということのないように」と。

すでに民衆の心に背いて苦しませることもできず、一つの静かな所を探して、お経を唱えようと思った。その禅院の上坊も下坊も、いずれも大いに人が満ちあふれていた。中間にだけ空いている弥勒閣が一つあったが、常に鎖がしてあり、人々は恐れて開けることができなかつた。僧(清虚)は(弥勒閣が)すでに空いているさまを見て、即ち直歳平章(僧職)を喚んで、この閣を開いて、中で経を唱えようと思った。主人や客僧たちは、清虚に語つてこう言つた。「この閣に向かつてはなりません。閣の中に一匹の黒い蛇がいて、托鉢の食器のように大きく、身長は二丈で、常にこの閣を守護していて、恐らく師を傷つけるでしょう。清虚はそれに対してこう言つた。「江南に宮亭湖神というものがあります。身長は数尺におよび変幻自在、またこれは大蛇で、にわか雨や暴風を自在にしますが、それでもやって来れば降伏させられました。ましてやこんな小さなもの、言うまでもなく退治できますよ」。

清虚は早速、鍵を探して門を開け、火をとつてすぐに(中へと)入つたが、まったく何も見えなくて、ただ蛇のなまぐさい臭いだけでした。その僧(清虚)は、しっかりと平常心で香を焚き、啓請(読経の前に仏前でその主旨を述べる)してこう言つた。「仏弟子である私は(衆生から、あなたの事を)こう聞きました。偉大なる衆生よ。この閣を守護していたのは、恐らく過去は賢聖たち、あるいは山の龍や諸神だったので、ね。仏弟子(である私)は今日、この閣の中に向つて、一心に経を唱え、上坊禅院のために湧き水を求め願います。願わくは諸神よ、皆に加護を与えてください。何を恐れることがあろうか。『金剛般若経』を聴き、読誦して、弟子である私に一箇のささやかな泉を布施してくれたら、それを上坊

禪院にお供えいたします」と。

そして真心から経を唱えると、一回の座禪が、まつげを合わせずに三日三晩続いた。心眼の中で、三人の婦人が弥勒閣の西北にいるのを見た。山の中腹にて小刀で地面をえぐっていたが、忽然として見えなくなった。夜明けになって、すぐに東北に向かい、谷に臨んで眼を閉じて『金剛般若経』を誦誦すると、ひとすじの水の流れが、婦人たちが小刀で地面を掘った所からやって来て、僧(清虚)の前を通過した。十五日間、泰然として同じ場所で見えていても、まだ信じられず、経を唱えることは止めなかった。さらに二日を経ると、だんだんとはっきりしてきた。その僧(清虚)はすくさま移動して、前に見た例の婦人が小刀で地面を掘った箇所に向かつて経を唱え、目をつぶるとさらに、水が背後から流れ出すのを見た。

また三日を経て、その僧(清虚)はついに杖を取って木の葉を取り除いて見ると、一つの湿地があり、大きさはまるで二尺の平たい皿のようだった。鋤を使って掘り、ついに一筋の水脈を見つけた。一つの穴ができて、石ころを転がせるほどになった。さらに真心から経を唱えること五遍、その穴の中の水が、知らないうちに満々と溢れていた。禪庭に向かつて水を引き、寺の皆のために供給した。このことから分かるのである。聖(仏の道を究めた聖人)は衆生の心に応じないことはないのだ、と。(信者の)信心のまことがあれば必ず(仏菩薩は)応じてくれる。信仰のはたらきよ、般若の力の効能よ、これを得て称えることのない者などいるだろうか。

16 清虚(その六)

(本文)

長安四年三月末、其僧清虚向少室山少林寺坐夏。其寺禪院在西、其院北山上有一佛堂、但是師僧、並不敢侵夜往。彼有一律師、侵夜往彼誦律、聞空中有言「阿師急去、遲即損害阿師。」至二更盡、未及得出、被神將刀鞘〔音笑〕刺其肋〔音勒〕下、便即下山而歸。至明日午時、律師便即捨壽。不經半歲、有一小師、專持火頭金剛神呪。徒衆同試呪力、小師即作法呪樹、其樹或衆條俱束、或群柯同屈。衆見靈驗、即共小師平議「上坊有一故堂、前後無敢宿者。阿師既持神呪、敢於其中念誦宿否。」小師報言「神靈勝伊萬倍之處、尚自降伏、此亦小小之者、蓋不足言。」小師乃殿持香鑪、往彼念誦、恃其呪力、降伏彼神。其夜、神遂現身、捉其兩脚、擲向澗底。七日失音、半年已來、精神短少。少林大德、承聞清虚在京之日、於悟眞寺講泉、兼伏大蛇、俱有神驗。遂語僧曰「阿師持經、大有靈應、請阿師作少法事、遣衆知聞。」報云「大德欲遣清虚作何法事。」僧衆同曰「上坊有一佛堂、此來無敢宿者。阿師能獨自念誦於彼宿否。」其僧報曰「此是三代尊客住持之處、正是師僧依止之處、云何不得」其僧即辨香油、往彼念誦、再宿三日、都無所見。僧等問禪院僧曰「昨日禪院客僧已三二日、總不見出、向何處去。」禪院僧等報言「上坊佛堂之中、便宿念誦。」大德等令急喚取、參差被神打殺。大衆自來同喚「阿師出來。」其僧報言、終無所慮。徒衆咸曰「阿師未異凡人、共我一種、何故於此、自欲損害。」答曰「萬

事不畏、大徳但歸。」及至一更向盡、其神即到、於佛堂東、轟然發響、似擲數十口瓦、聲震空中。其僧即燃火出看、寂然無所見、身毛皆豎、即誦十
 一面觀世音呪、繞佛堂一匝。堂内若水牛鬪聲、像亦震動。誦呪七遍、其聲遙烈、轉更哮吼、響谷動山。即向佛堂前、正立思惟、欲不敢入。忽然更
 却思惟如何在此、不能降伏。捺心即入、聲更轉盛、堂中之燈、尚亦示滅。呪既無驗、即誦金剛般若經。及誦一遍、其聲漸小、至於三遍其聲即斷。
 迄于天明、寂然安靜。故知般若之力、不可思議。

(校異)

禪院客(黒) 一□□□

瓦(黒・高) 一尾

(大意)

長安四年(七〇四年)三月末、その僧、清虚は少室山(崇山)少林寺に向かい、安居していた。その寺の禪院は西にあり、その禪院の北にある
 山には一つの仏堂があるが、しかし、僧たちは夜通しでそこに行くことをためらった。その時、ある一人の律師(戒律に精通する法師)が夜通し
 そこにいて律を読んだところ、空からこう言う声が聞こえた。「師は急いで去れ。遅れると師に害を及ぼすぞ。」二更(夜九時から十二時頃)が
 終わる頃に至っても、未だ出ることを得ず、神によって刀の先端で肋骨の下を刺されたので、下山して帰った。翌日の午時(昼十一時から午後一
 時頃)に至り、律師は死んだ。

半年も過ぎないうち、ある若い法師は、火頭金剛(烏枢沙摩明王)の神呪を専門に受持していた。皆一同に呪力を試そうとして、若い法師はそ
 れで法を起こし、樹木に呪術をかけた。その樹木はある時は細長い枝すべてが束になったり、ある時は枝すべてが前屈みになったりした。皆は(そ
 の)靈験をみて、すぐさま若い法師と相談した。「上坊にはある古い堂があつて、これまでもこれからも(恐ろしさで)泊まることのできる者がい
 ない。師はすでに神呪を受授している。その中で念誦しながら泊まってはくれまいか。」若い法師はこう返して答えた。「(仏の)神靈は彼よりも万
 倍のところでも勝り、さらに自ら降伏したこともある。これも小物で、まったく足らないものだ。」若い法師は香炉を嚴重に握りしめ、そこ
 に行つて念誦した。呪力に頼つて、その神を降伏させようとした。その夜、神はついに現れ、その(法師の)両足をとつて、山間の清流の底に投
 げた。七日間声を失い、それから半年間、精神がおかしくなつてしまった。

少林の高僧が、清虚が京にいる日々(のこと)を聞きつけた。それは悟真寺にて泉を請うたり、加えて大蛇を降伏させたりと、全てが神の靈験
 によるものだった。よつて僧(清虚)に語つて言つた。「師はお経を受持し、大いに靈験がある。師にお願いがある。少々法事をしてもらい、皆に

広く知らしめられたし。」返事してこう言った。「高僧は清虚に何の法事をやってほしいのですしょうか。」僧一同は口を揃えていった。「上坊にとある仏堂があって、これまでは泊まることのできる勇氣ある者がいなかった。師は独りでお経をととなえ、そこに泊まってくれないか。」その僧は返事してこう言った。「ここは代々にわたって尊い客人が寝泊まりするところで、まさに師や僧が依止する場所でもあり、なにをもつていけないというのですか。」その僧(清虚)は香油を用意し、そこに向かって念誦し、さらに三日間泊まって、全く姿を見せなかった。僧侶たちは禅院の僧に訊いて言った。「さる日から禅院の客僧(清虚)はすでに二三日も見かけないが、どこに行ったのか。」禅院の僧が返事して言った。「上坊の仏堂にて、宿泊し念誦している。」高僧たちは急いで呼び戻そうとしたが、おそらく神に殺されたのだろう、と(推測した)。一同がやって来て呼びかけた。「師よ、出てきて下さい。」その僧(清虚)は返事して「心配はいらない。」と言った。皆は口を揃えて言った。「師も凡人と異ならず、我らと同じである。なぜここで、自分自身に危害を加えさせるのだ。」答えてこういった。「万事、恐れることはない。高僧(皆さん)、お戻りなさい。」

初更(夜七時から十時頃の間)が終わる頃に、その神が到着した。仏堂の東で(突然)巨大な音(響き)がした。まるで十数個の瓦を投げたような音が空中に響いた。その僧(清虚)は火をつけて外に出てみたが、(周囲は)静かでも見えず、身の毛がよだつた。すぐに十一面觀世音呪をよみながら、仏堂を一周した。仏堂内にはまるで水牛が争っているような声や、震動もあった。呪文を七回よむと、この(争っている)声がますます激しくなり、(獣の)咆哮に転じた。谷を響かせ、山を動かした。

そこで(清虚は)仏堂前に向かい、考えを整えた。しかし、(仏堂に)入ることができず、忽然として考え直すと、どうして私はここにいるのか。降伏させてやるぞ、と心を決めて、即座に入った。声はますます大きくなり、仏堂内の灯も消えそうになった。呪文が無効のようだったので、『金剛般若経』を念誦し(はじめ)た。一遍読み終わると、その声が段々小さくなり、三遍読み終わると、その声が途絶えた。そのまま夜が明け、(周囲は)ひっそりと静まり返った。このように、般若の力は言葉に出来ない程素晴らしい。

17 清虚(その七)

(本文)

去神龍二年十二月十一日、齊州義淨三藏及景闍梨、奏清虚人内祈雪。二七日、雖得少分、未能普足。勅語清虚「阿師祈請、雖不能稱意、任阿師選寺住好否」其僧自恨祈請不稱聖意、遂答勅云「實不歡喜。」大德等見作此對、亦皆失色。阿師既觸天威、即合付法。勅又云「如得雨雪、即與阿師亂綵二百段、兼授阿師五品、并作薦福寺綱維、阿師何意、遂不歡喜。」答云「幸蒙天恩、驅使祈請雨雪、自恨上不覆天心、下不允人望、愚誠徒懇、不愜聖心、夙夜兢懼、唯知待罪、濫荷天恩、所以不喜。」勅云「且放阿師出外念誦、還須祈請、忽得雨雪、即須進狀。」因便奏云「此度不降雨雪、即爲一切衆生燒指。」又降勅曰「朕喚阿師來供養、可遣阿師來受苦。又父母遺體、豈可毀傷。阿師必不得漫有傷損。」食訖、辭聖上出、即向南山炭

谷龍湫「子反由」上祈請雨雪。雖復雪下、終不能稱心。更移就索曲村安樂佛堂中誦金剛般若、又經七日、時得薄雪、還不稱心。遂即發願燒指兩節、經一日一夜、燒未盡間、忽然四面雲合、雨雪參雜而下。衆皆愕然驚怪、二日始絕。百姓父老等、連狀欲奏、且於薦福等共三藏平章「清虛昨城南燒兩節指、爲法界祈請下雪、燒盡兩節、衆人同看、所有骨灰、今不見在。今朝村人大小欲爲塗藥、其兩指節還復如故。」三藏遂云「此事難信、不近人情、伊是凡僧、未至羅漢、如何燒指已盡、更得却生。既非聖流、無有此事。」即語村人父老等急歸州縣知聞、直是將作妖惑、欲益返損、却責老人、非但誑炫凡庸、亦是誣罔聖上。僧徒聞此、轉加不信。其僧既見衆人起謗、更入道場、啓請十方諸佛、一切賢聖「弟子爲法界蒼生、燒指祈雪、蒙諸天龍王等、應時降雪。又令弟子所燒之指、燼而重生。咸起謗言、不加淨信、誤他四衆、墮於地獄。弟子今更發願誦般若經、兩日之間、願生指重落。」至于二日、勤加念誦、兩節重生之指、還復更落。衆見指落、重起謗言「阿師當時燒生、如今始落。」其僧即報衆曰「且向城南前祈雪處、於彼養瘡、還遭重生、不知得否。」衆人同曰「阿師似著狂病、常行謗語。」即往城南而養瘡、念誦不輟。至十五日內、指節又生長一節半、指甲亦出。衆人見者、莫不驚異。咸曰「亦不足怪、此道人有妖術。」則知般若之力、二乘之所不知、凡俗聞之、皆能起謗。

〔校異〕

恩(黒・高)―思

〔大意〕

さる神龍二年(七〇六年)十二月十一日、齊州の義淨三藏および景闍梨は、清虚を宮中の雪乞いに招くと進言した。十四日にして少しは(雪が)得られたが、まだ十分ではなかった。皇帝からの命令でこう言われた。「師の祈禱では、満足できるところにはいかなが、師に任せ、寺院を選んで住めばよい。」その僧(清虚)は皇帝の意にかなわぬ祈禱を行ってしまったことを自ら悔やみ、なんと皇帝の勅にこう返してしまった。「実にうれしくありません。」

大徳たちは彼の対応をみて、皆一同、顔色を変えた。師(清虚)はすでに天子の威光にふれてしまい、まさに法に処されるべきである。また、皇帝の勅はこう言った。「(これから)もし雨雪を得ることができたら、即、師に二百段の様々な布束を与え、さらに師に五品の階級を授与する。並びに薦福寺綱維(寺で僧を監督し、事務をとりしきる僧の総称)とする。なぜ師は喜ばないのか。」答えてこういった。「幸運にも天恩(天子の恩)のお陰で、雨雪の祈禱を承ることができましたが、自ら恨めしく思ったのは、天子の心に添うことができず、民衆みな希望にも応えられずにいることです。わたくしはただただ誠心誠意に行いますが、天子のご厚意に応えることができず、日夜恐々とし、ただただ罰を待つのみで、みだりに天子の御恩を荷ってしまうことになり、ゆえに喜べないのです。」

皇帝の勅が下りた。「では、師を外に放し、お経を念じさせ、折袴も(引き続き)行い、たちまち雨雪が得られたら、すぐに報告せよ。」その便りに返していった。「今度(こそ)雨雪を降らせることができなかつたら、一切衆生のために指を焼きます。」皇帝の勅がまた下った。「余は供養のために師をよんだのであつて、師に苦難を受けさせるためにつかわしたわけではない。また、父母にもらつた大事な体を、いかなることも傷付けさせられない。師は必ず、むやみに(その身を)傷付けないように。」

食事を済ませ、皇帝のもとを辞して出ると、すぐに南山・炭谷・瀧湫に向かい、雨雪を祈祷した。また雪は降つたが、終始満足できるところまでいかなかった。さらに、素曲村・安楽仏堂内に(場所を)移し、『金剛般若経』を念誦するが、七日がたち、時にわずかな雪しか得られなかつたので、やはり満足できるころまでいかなかった。それで発願し指二節を焼くと、一昼夜が経ち、焼き終わらないうちに、突然四方から雲が集まり、雨雪が混ざつた形で降つた。みな一同に仰天し、二日間で止んだ。百姓民衆等は一同朝廷に書状で報告しようとし、薦福寺にて、三蔵平章(官職名)へも、ともに伝えようとした。

「清虚は昨日、城南にて指二節を焼き、法界のために降雪を祈祷した。指二節が焼き切れたのを、皆の目で確認した。全ての骨と灰は今でも見えるようだった。今朝、村の人々が薬を塗つてあげようとしたところ、その二節の指が元通りに戻つていたのだ。」三蔵は語つた。「このことは真に信じられぬことであつて、ありえない。彼は一平凡な僧侶であり、羅漢までいたらない。なにゆえ焼き失われた指を再び生き返らせられるのか。聖人の類でもないのに、そんなことのあるわけがない。」

すぐに村人の父老等に、急いで州・県の長官に知らせるように語つた。(これは)まさしく妖術による惑わしであり、利益などなく逆に損となる、と、かえつて父老たちを責めた。(これは)凡庸を偽り、誇示するだけでなく、皇帝を欺くことにもなる。僧たちはこれを聞き、不信に転じた。その僧(清虚)は皆が誹謗をしはじめるのを見て、道場に再び入り、十方諸仏、一切賢聖を請うた。「弟子(私)は法界及び蒼生のため、指を焼き雪を祈つた。諸天龍王等のお陰で、すぐさまに雪を降らすことができた。また弟子の焼かれた指を、灰から元に戻させてくれた。(しかし、周りの)皆が誹謗中傷の言葉を言い、真心で信じてくれず、(このままでは)ほかの四衆を誤解させ、地獄に落とすことになってしまふ。弟子はいまさらに発願し『金剛般若経』を誦し、二日間のあいだ、健在な指が再び落ちることを願う。」

二日(間)に至つては、ますます念誦に励み、再生した二節の指は再び落ちた。指が落ちたのを皆が見て、再び誹謗の言葉が起つた。「師はその時に焼いた指が、やつといまになつて落ちたのだ。」その僧は皆に返事して返した。「では、城南前での雪を祈祷する場所にて、そこで傷口を癒やし、再び(指が)再生できたら、いかがなものでしょう。」皆は一同に言つた。「師は気が狂つたようだ。常に狂言を言ふ。」すぐに城南に向かい、傷口を癒やし、『金剛般若経』を念誦し続けた。十五日以内に、指はまた一節半ほど成長し、爪も出てきた。皆それを見て、驚かない者はなかつた。皆が言つた。「これも驚くべきことではない。この道人は妖術をもっているのだ。」

般若の力は二乘(大乘小乘)ともに知らないところはない。凡俗はこれを知り(これに触れても)皆、誹謗を起さず(ものなのである)。

18 清虚(その八)

(本文)

去景龍二年。清虚始還故里。至太極元年六月二十九日夜。東江水漲。僧時在惠義寺停。其水直入寺中。衆僧各自併當衣物。其僧房中有一小閣、所有衣物、并遂閣上。便即然燈趺而坐、一心正意念誦金剛般若經。良久聞水入房聲、把火照看、了無一滴之水。其餘諸房皆被水入。僧徒聞見非是一人。般若威力、卒難縷說。

(校異)

なし

(大意)

さる景龍二年(七〇八年)、清虚ははじめて故里に帰還した。太極元年(七二二年)六月二十九日の夜に至り、東江の水位が高くなった。僧(清虚)はその時、惠義寺に泊まっていた。その水はまっすぐに寺の中に入って、僧たちは各自で衣服を片付けていた。その僧の部屋の中には小さい閣があり、全ての衣服等は、その閣に置いてあった。そこで灯りをつけて結跏趺坐した。他に心を動かさず、ひたすら一つのことを心を集中して「金剛般若經」を念誦した。長い間水が部屋に入ってくる音を聞いて、火を灯してみると、一滴の水も全くなかった。その残りの部屋はみな、水に浸かってしまった。僧徒がそれを見聞きしたのは一人(だけ)ではなかった。般若の威力は、説明しきれないものである。

19 陳文建

(本文)

陳文建者、梓州郫〔音妻〕縣人也。身有騎都尉勳、每於州城門首堂上、常誦金剛般若。發願爲父母祖父母等、誦滿八萬四千遍、尋亦誦了。刺史元善應緣事、被追入京、令文建誦般若經、滿五千遍。建卽爲誦、及善應至京、皆得清雪。

(校異)

縁(黒) ーシ

(大意)

陳文建は梓州の郫県の人である。騎都尉の勲位を有しており、州城にある門前の堂上にいる度、常に「金剛般若経」を読んでいた。父母や祖母などのために発願し、八万四千遍を読み終わると、数を確認して終了した。刺史、元善が事情により追われて入京することになり、陳文建に「金剛般若経」五千遍の読誦を命じた。陳文建はすぐに、彼のために(「金剛般若経」を)読んだ。元善が召喚に応じて、都に到着した時、全てに關して潔白だったことがわかった。

20 陳徳

(本文)

銅山縣人陳徳者、常以寫經爲業。忽然因病疹、爲冥司所追。見地下築「音竹」臺、徳問「是何臺也。」冥司報云「是般若臺、爲陳文建欲至、築此臺以待之。」其徳却蘇、具說此事、遠近知聞、競持般若。「牛頭山靈瑞寺禪師惠融所說」

(校異)

なし

(大意)

銅山縣の人、陳徳は、(常に)写経をなりわいにしていた。突然病にかかり、冥土の役人に追われた。地下に建てられた高台(台座)を見て、陳徳は訊いた。「これは何の台ですか。」冥土の役人はこう返事した。「これは般若の台です。陳文建がここに来るときのために、この台を建てて待っています。」陳徳は生きかえり、つぶさにこのことについて話したところ、広く知られて、(皆は)競って「金剛般若経」を受持するようになった。「牛頭山靈瑞寺の禪師、惠融による話である。」

21 李廷光

(本文)

趙郡李〔音貝〕廷光者、爲德州司馬。深信因果、誦持金剛般若。每眼所見、常有圓光。誦念稍勤、其光漸大誦念若簡、其光即小。即知般若冥感、精誠所通也。

(校異)

誦(黒・高)―諸

(大意)

趙郡の李廷光は、德州司馬であった。因果を深く信じ、「金剛般若経」を誦誦していた。目に入るもの全てに丸い光がついていた。誦誦に少し力が入ると、その光が大きくなる。誦誦の力を抜くと、その光が小さくなる。このことで、はっきりと分かるのである。「金剛般若経」の感応の力が、誠実な真心ゆえに通じたことを。

(本文)

贊曰大哉神力、不可思議。蓮承法座、芥納須彌。地變神足、天開聖池。非定非慧、斯焉取斯。
金剛般若經集驗記中

(校異)

なし

(大意)

贊に曰く、「偉大なるかな、仏の神秘的な力は、言葉で言うことできないほどすばらしい。蓮の花は仏のお座りになる座として承り、芥子ほどの極小のものを、須弥山のような広大なものに納めるのだ。大地は変動して自在に超自然的な力を発揮し、天は(仏の)聖池の位として開かれる。定の境地を否定したり、慧の境地を否定したりする考えなどがあるとしても、どうしてこのような考えを取ることができようか(仏の素晴らしさは決して否定できない)。